

宇宙曆七九九年五月五日。

同盟首都ハイネセン、最高評議会ビルの地下深くでは、緊急の国防調整会議が開催されていた。

その場の空気を仮に可視化するなら、おそらく鉛がわだかまっていたであろう。

『私は銀河帝国軍上級大将ウォルフガング・ミッターマイヤーだ。卿らの首都ハイネセンの上空は、すでにわが軍の制圧下にある。ただちにすべての軍事行動を停止し、武装を解除せよ。然らざれば首都ハイネセンに対して無差別攻撃を加えるであろう。返答まで三時間の余裕を与えるが、その前に、余興をひとつ、見せてやろう』

この極めて高圧的な宣告とともに、同盟軍の中樞、統合作戦本部ビルの地上部分が極低周波ミサイルで攻撃、破壊されたのである。

会議に顔を並べた同盟政府と軍の高官は、この事実と光景にみな顔色を失っていた。

ただひとりを除いて。

「結論を言おう……………」

そのひとりの口がおもむろに開かれた。会議の首座にあるその顔に、全員の視線が集中した。

帝国軍のハイネセン攻撃とともにフェザーン侵攻以来の冬眠から突然目覚め、この会議を招集した同盟最高評議会議長ヨブ・ト

リユーニヒト。だがその表情は、その場に在る他の者とは明らかに違った。陽気ではむろんなかったが、奇妙に危機感も悲壮感も欠落しており、表情とあわせて、仮面をかぶった人形が機械じかけで声を出しているかに思えるのだった。

息を呑んでその先の言葉を待つ一同に対して、しかし彼ははくらかすように語を継いだ。

「だが、その前に、ふたつ、軍に確認したいことがあるのだが」その言葉に二人の軍高官、統合作戦本部長ドーソン元帥と宇宙艦隊司令官ビュコック元帥が顔を上げた。

しかしながら議長の質問は、この二人も、そしてその場の誰も想像だにできなかったものだった。

「いま、この地上から、同盟全域に全帯域超光速通信を発することは可能かね？」

ドーソンがビュコックを振り返り、ビュコックが即答した。

「可能です。上空の帝国軍は通信封鎖をかけておりません」

「そうだろうとも」

その答えに、トリユーニヒトは得たりとばかりにうなずいた。

「彼らにしてみれば、一刻も早く、我々からヤン提督に停戦命令を伝えてもらわなくては困るのだ。通信封鎖はできないはずだ」

そう説明すると、彼は言葉を続けた。

「ではもうひとつ」

二つ目の問いは、さらに予想外のものだった。

「彼らがハイネセンに対してそうしたように、こちらから、上空の帝国軍の通信回線に割り込むことはできるかね。彼らの司令部

を介さず、各艦に、直接に、画像音声つきで、だ」

ドーソンとビュコックは顔を見合わせた。答えたのはやはり、ビュコックだった。

「ここまで彼我の距離が近ければ、可能です」

「結構」

莞爾としてトリユーニヒトはうなずいた。

「では、最高評議会議長としての、結論を言おう」